

# 明治時代の伊勢神宮

皇學館論叢 第二十七卷第二号  
平成六年四月十日

新 田 均

## □ 要 旨

本稿は、平成五年十二月十一日の『皇學館大學月例文化講座』における「近代の伊勢神宮」と題する講演に若干の手直しをしたものである。その目的は、明治時代に行われた伊勢神宮の改革を概観することにあった。この改革の原因を明確にするために、先ず幕末・明治初期の政治目標から説き起こした。次いで具体的な改革を、神宮の土地、神官組織、祭祀の順で説明し、その大枠を示した。

## □ キーワード

伊勢神宮 明治維新 御饗料田 神官組織 式年遷宮

## 明治の国造りの原則

明治時代の国造りには様々な目標があったが、本稿で問題にする伊勢神宮の改革に関係するものとしては、大まかに言って、三つの目標を挙げることができる。その一つは「天皇親政」である。これは、自ら政治を行う天皇を中心として国の政治を運営していくというものである。そして、そのような天皇の理想とされたのが第一代の神武天皇であった。慶応三年（一八六七）十一月九日に出された王政復古の大号令は、「今後は摂政・関白や幕府を廃止し、すべて神武天皇が即位された時のことを基本として政治を行う」旨を宣言している。

二つ目は「天皇親祭」である。これは、国家の祭祀を天皇みずから行うことである。そして、政治も祭祀も共に天皇がみずから行うという意味で「祭政一致」という言葉が盛んに使われた。慶応四年（一八六八）三月十三日に出された布告では、「今度、天皇が王政を復古し、すべて神武天皇即位当時のことを基本として、何事も新しくし、祭政一致の制度に帰ることを宣言されこと。したがって、先ず第一に神祇官を再興し、続いて次第に諸祭奠も復興すること」が明言された。

三つ目が「近代化」である。慶応四年三月十四日のいわゆる五箇条の御誓文は「古くて悪い習慣を止めて、世界に通用する普遍的な原理に基づかなければならないこと」を明らかにしている。

## 背景としての近世・幕末

右の述べた三つの目標は、明治になって突然現われたものではない。これらは、すでに近世において存在していた

諸々の思想が組み合わされて出来上がったものである。これを組み合わせさせたものこそ、ペリー来航によってかきたてられた、西欧列強の圧力をはねのけて日本の独立を守らなければならないという意識であった。この要請から、それまで存在していた諸々の思想が組み合わされ、具体化され、検討された結果、先の三目標が導き出されたのである。神武天皇を重視する思想には、政治の学である儒学、とりわけ水戸学の貢献が大きかったと言われている。水戸学の主要な学者である会沢正志斎は、本居宣長の『直日霊』について論じた『読直日霊』の中で「天皇の血統が正しく存在し続けてきたのは、神武天皇が即位の時に、君臣父子の倫理を明らかにしたからである。そのことを宣長が論じていないのは遺憾である」と述べている。

このような神武天皇重視の思想は、幕末において、歴代天皇の山陵復興運動という形で具体化された。幕末の水戸藩主・徳川斉昭は、神武天皇陵を古代の形式によって修理すべきであると主張した。また、彼は、光格天皇（第一一九代、在位期間一七九一―一八一七年）の崩御に際して、山陵を造営すべきであると主張した。そして、彼らの運動の結果、孝明天皇（第二二一代、在位期間一八四六―一八六六年）が崩御された時には、山陵が造営され、その葬儀は従来の仏式から神道式に切り替えられた。

また、水戸学の神武天皇重視の思想の影響を受けた国学者たちは、神祇官復興運動という形で、その思想を具体化した。彼らはキリスト教こそ日本にとっての脅威であると考えていた。そのため、キリスト教が日本に広まることを阻止しなければならず、そのためには日本の神々を大切にすることを思想を広めなければならないと考えた。そして、それを実現するためには、神々を祀る役所である神祇官を再興することが必要であると主張した。この役所は古代の朝廷の役所で、中世になくなってしまったものである。

この神祇官は、古代の役所ではあるが、もちろん神武天皇の時代に存在していたわけではない。その再興が神武天

皇重視の思想から主張されたのは、この役所の設置が神武天皇の御精神に由来していると考えられていたからである。幕末の国学者・大國隆正は、慶応三年に提出した『神祇官本義』の中で、「神祇官の設置は、神武天皇が皇室の祖先や天の神を祀って、祖先の教えにしたがうことを明らかにされたことに由来している」と主張した。

幕末の国家的危機意識は、国家統治の正統性を追求する思想を歴史の前面に押し出し、その結果、近世に発達した神武天皇重視の思想が具体的運動として展開されることになった。そして、明治政府は王政復古の理想を神武天皇の業績に求めることを宣言した。それは、神武天皇の業績に基づいて、明治天皇の業績を作り上げていくことを意味していた。神武天皇は九州から出発して東に向かい、奈良に入って、ここに都を定めた。これにならって、明治天皇は都を京都から東京に移した。また、東京で神祇官を再興し、そこでみづら天神・地祇を祀った。明治天皇が東京に向かう途中の明治二年（一八六九）三月、歴代天皇の中で初めて伊勢神宮にみづから参拝したのも神武天皇に由来する考えられた「祭政一致」の具体化であった。

さて、王政復古以後の神道に関する政策の課題は、先に述べた三つの目標を具体化していくことであった。それは即ち、天皇親政・天皇親祭・近代化にふさわしい国家的な神道の制度を作り上げていくことであった。しかし、そこにおいては改革の実行と伝統の保持という難しい問題が生じることになった。伊勢神宮ももちろん例外ではなかった。

### 神宮の土地改革

明治の神宮改革の目的は、一言でいえば、神宮における私的なものを排除して、その公的な性格を明確にすることであった。このことを以下では、神宮の土地、神宮組織、祭祀の改革について概観することにする。

明治四年（一九七）一月、政府は「上知令」という法律を公布した。これは、政府が社寺の境内地以外の所有地を没収して、代わりに相当の禄制を定めるというものであった。これは、明治二年六月の版籍奉還の趣旨を社寺にも及ぼしたものであった。即ち、藩が土地と人民を天皇に返したのであるから、社寺もその土地と人民を天皇に返さなければならぬというものであった。

ところで、明治まで神宮の財政と祭祀は、基本的に豊臣秀吉以来税金の徴収を免除された宮川以東の伊勢国の朱印領に依拠していた。上地令によって、この朱印領はすべて没収され、神宮経費は基本的に官費によって賄われることになり、没収された土地は、入札の後に民有地となった。この朱印地には、神宮の財政を支える税金を徴収する土地の他に、祭祀に用いる諸々の品を提供する土地も含まれていた。それらの品々は、祭典御料と呼ばれ、米、鮑、鯛、野菜、塩などである。朱印領が取り上げられた結果、これらすべては支給された官費によって購入されることになった。これによって、祭典御料に関係する祭祀が大きな変化を受けることになった。その変化の一例として、神宮神田を取り上げることになる。

古来、神宮が所有する田の中に御饗料田と呼ばれる田があった。これらの田は、神宮の主要な三つの祭（年二回の月次祭と神嘗祭、この三つを総称して三節祭という）の時に神に捧げる御食事（これは、由貴大御饗と呼ばれる）や、豊受大神宮において毎日二回神に捧げる御食事（これは、日別朝夕大御饗と呼ばれる）などに用いる米を栽培する田であった。

この御饗料田が近世には、皇大神宮には二町四段あった。この内の一町は度会郡宇治郷楠部家田にあり、宇治田、あるいは抜穂田と呼ばれていた。この田は、神宮を創祀者である倭姫命が神の教えを受けて定めたものであると伝えられていた。また、別の一町は、度会郡城田郷と度会郡田辺郷にあり、荒木田と呼ばれていた。この田は、第十三代の成務天皇の時に、荒木田神主の先祖が開墾して神宮に寄付したものであると伝えられていた。この他に、別宮荒祭

宮の御饌料田が四段あった。また、豊受大神宮の御饌料田は、豊宮崎に三町あった。

明治四年にこれらの御饌料田が廃止となった。その結果、御饌料田に関する祭祀も中絶してしまった。その祭祀とは、種蒔きの祭り、田植えの祭り、稲刈の祭りである。稲の祭を中心とする神宮にとって、この御饌料田の廃止と、その祭祀の中絶は重大な問題であった。したがって、以後、それを復興しようとする努力が続けられることになった。明治三二年（一八八九）には、内宮の田として度会郡四郷村大字楠部字家田の田が、外宮の田として宇治山田市大字岡本町梶ヶ岡と宇治山田市大字豊川町字宮山腰の田がそれぞれ購入されて御饌料田の一部が復興されることになった。これによって、御饌の御料米を神宮自身で生産することができるようになったが、祭祀の再興はもっと後のことであった。

昭和四年（一九一九）、式年御造営事業の一部として楠部御饌料田の拡張改修工事が始められた。この工事は昭和八年（一九三三）に終了し、楠部御饌料田は「神宮神田」と改称された。この年に、種蒔きの祭り（神田下種祭）と収穫の祭り（拔穂祭）が再興された。田植えの祭り（御田植祭）はもっと前に再興されていた。以後、両正宮以下摂末社にいたるまで、神嘗祭を始め年中一切の諸祭儀に用いる白酒・黒酒・醴酒・御飯・御餅などの御料は、すべてこの「神宮神田」で収穫された米を用いることになった。そして、岡本町・豊川町の御饌料田は、「御料田」と改称されて、予備の御料を収穫する田として残された。

### 神宮の神官組織の改革

神官組織の改革については、神官の世襲の廃止と御師の廃止という二つを指摘できる。先ず、神官の世襲廃止につい

て述べてみよう。

しかし、その廃止過程を述べる前に、維新以前の神宮の神官組織を説明しておくことが理解の助けとなるであろう。維新以前の神官の組織は、祭主・大神宮司・禰宜・権禰宜・内人・物忌等の職から構成されていた。

祭主は神宮を統括する最高の職で、総官とも呼ばれ、この職につく人は現在とは異なっており男性であった。その本務は京都の神祇官の祭祀に奉仕することであり、祭主は兼務であった。そのため、祈年・神嘗・両月次の年中四度、勅使として伊勢に参向する時以外は京都に在住し、神宮の日常の祭祀や実務には携わらなかった。平安時代末から鎌倉時代にかけて伊勢に在住したこともあったが、武家の勢力の伸張にともなって帰京した。そして、室町時代末以降、大中原氏の内の藤波家が世襲するようになった。

大神宮司は、神宮の所在地に住んで、主に神宮の行政事務を司り、その位階は禰宜の上位の者よりも低くかった。元来は一員で、後に大司・小司の二員となり、さらに権大司を加えて三員となったこともあったが、一員に復して明治を迎えた。当初任期六年であったが平安時代初期から専ら大中原氏の氏人が任じられるようになり、室町時代以後は河辺家の世襲となった。

禰宜は、神宮の祭祀を司る職で、元来は両宮各一員であったが、次第に増えて鎌倉時代末には各十員まで増加してそのまま明治に至った。一番位の上の禰宜を長官と称し、中世以降の神領衰退によって大神宮司の力が衰えると、神宮の祭祀・行政の一切を統括するようになった。中世以降、内宮は荒木田氏、外宮は度会氏の世襲となり、しかも近世においては、その直系の家に限られるようになり、この家は神宮家と呼ばれた。神宮家は荒木田氏の場合は七姓、凡そ三十家。度会氏の場合は六姓、凡そ三十家であった。

権禰宜は、古代からあった神宮神官の正式な職ではない。それは中世以降、荒木田・度会両氏人の繁栄によって、

禰宜になれない神官が増えたために設けられた職であり、定員はなかった。近世においては、禰宜になりうる権禰宜、言い換えれば、神宮家出身の権禰宜を権官と呼び、禰宜になりえない権禰宜、言い換えれば、神宮家に次ぐ家柄の権禰宜（荒木田氏五十余家、度会氏八十余家）を権任と呼んだ。権官は神宮の恒例祭祀に従事し、権任は勅使参向や遷宮といった臨時の祭祀の一部を担うのみであった。権禰宜の人数は、両宮合わせて近世で平均二百人前後であったと思われる。

内人は、特定の役割を与えられて神宮に仕える人々であった。それはある祭祀のある部分とか、服や笠などといった特定の神饌を作るとか、祭祀に用いる土器などの道具を作るとかといった役割であった。近世の元文の頃（一七四〇年頃）で、内宮五十人、外宮三十人程度であった。

物忌は、神の最も近くで祭祀を行う職で、未婚の童女たちであった。

要するに、維新以前の神宮の神官は、すべて世襲であった。しかも、内宮を支配していたのは荒木田氏の人々であり、外宮を支配していたのは度会氏の人々であった。つまり、神官の組織から見た場合、神宮は、それぞれ異なった家系によって世襲される、内宮を頂点とする神社群と外宮を頂点とする神社群の並立状態にあったのである。

神官が特定の家系によって世襲されるという状態は神宮に限ったことではなく、中世以降の普遍的な現象であった。明治政府は、このような状態では神社はその家系の私有物であり、それは祭政一致の原則にふさわしくないと考えた。そこで、明治四年五月十四日、神官の世襲を廃止して、政府がこれを任命するという布告を出した。

明治四年一月二八日、まず祭主・藤波教忠が罷免となり、代わって神祇大副の近衛忠房が、この職を兼務することになった。次いで、上記の法律が出された五月十四日に、神宮に対して神官の世襲を廃止することが通知され、新しい神官の組織が定められた。

その新しい組織は祭主・大宮司・少宮司・禰宜・権禰宜・主典・権主典・宮掌という職から構成されていた。この組織改革によって、神宮は一つの神社群となり、それを大宮司が統括することになった。また、権禰宜が正式な職となり、内人や物忌が廃止され、主典・権主典・宮掌という新しい職が定められた。また、各職の定員が著しく減らされ、禰宜は内宮・外宮それぞれ十員であったものが、それぞれ五員となった。権禰宜は、明治初年には百六十人ほどいたが、その定員は内宮・外宮それぞれ五員と定められた。

同年七月二三日、内宮の禰宜と権禰宜が任命され、翌二四日には、外宮の禰宜と権禰宜が任命された。この時、両宮の禰宜と権禰宜に任命されたのはすべて神宮家の人々であった。しかし、内宮に度会氏の者が六人、外宮に荒木田氏の者が六人任命されたことは、それ以前には考えられないことであった。そして、これ以後、新しい者が任命される度に、荒木田氏・度会氏以外の人々が増えていった。

さて、伊勢神宮の所在地である宇治山田の地域には、明治維新以前、御師と呼ばれる人々がいた。彼らは、上は禁裏・公卿・將軍から下は武士・庶民に至るまで全国に檀家を持ち、各地に出かけて御祓大麻を頒布したり、檀家が参宮に来ると彼らを自宅に宿泊させ、そこで神樂をあげたりすることを仕事としていた。しかし、それは神宮の正式の神官ではなかった。

というのは、古来神宮では、天皇以外の者が個人的に幣帛を奉り、祈禱を行うことは禁止されていたからである。しかし、中世以降、武士の台頭によって神領が衰えると、経済的理由から御師が発生し、発展した。そして、庶民の神宮に対する信仰を盛んにしたのである。

御師の中で最も実力を持っていたのは、会合家と三方家であった。宇治山田の地域は、豊臣秀吉以来、税金が免除となり、一定の自治が認められた。この地域の内、宇治の地域の自治を行う者たちは宇治会合年寄、山田の地域の自

治を行う者たちは、山田<sup>やまださんげうとより</sup>三方年寄と呼ばれた。会合家とは、宇治会合年寄を構成する家（約五十家）のことであり、三方家とは、山田三方年寄を構成する家（二四家）のことである。そして、山田の地域には山田三方年寄の下に町年寄があり、自分の居住する山田の一郷を支配していた。そして、町年寄を構成する家を町年寄家と呼んだ。彼らも御師を営んでいた。以上の人々の下に、なんら自治組織における役職を有しない御師があり、彼らは平師職と呼ばれていた。

つまり、近世の宇治山田は会合家と三方家の支配する地域であり、彼らは御師としての活動によって、その実力を保っていた。また、彼らに支配される人々も、御師としての活動によって生活するか、それらの人々の活動の恩恵によって生活していたのである。神宮家のみは、この自治組織の支配を免れていたが、彼らもまた御師を営んでいた。したがって、宇治山田という地域全体から眺めると、神宮本来の国家祭祀は、御師の行う個人的な祈祷の中に埋もれてしまっていたというのが近世の状況であった。

この状態も明治政府は祭政一致の原則にふさわしくないものであるとして、明治四年七月十二日に、御師を廃止し、彼らによる神宮御祓大麻の頒布を禁止した。しかし、神宮御祓大麻の頒布や、庶民の個人的な祈祷を認めることによって、国民の神宮に対する信仰が維持されているという側面を否定することはできなかった。そこで、神宮を運営する役所として明治四年七月二十四日に設置された神宮司庁が、明治五年六月から神宮御祓大麻を地方政府に送って、そこから国民に頒布することになった。また、同年七月、内宮に、明治八年十二月、外宮に、それぞれ祈祷所が設置された。この両祈祷所は、ともに明治二四年二月に神樂殿と改称されて今日に至っている。

## 神宮の祭式の改革

神宮組織が改革された結果、両宮の祭祀を統一し、祭祀の分担を定めることが必要となった。そこで、神宮では、最も大切な祭祀である神嘗祭の祭式から手をつけることにし、明治五年八月九日、当時政府や皇室の儀式を管轄していた式部寮と、諸宗教を管轄していた教部省に、神嘗祭式の改正案を提出した。明治七年六月二十日、教部省はこの改正案を許めるとともに、他の祭祀も神嘗祭式に準拠して改正するように指示した。そこで、神宮は他の祭祀についても改正を検討し、明治八年十一月二十八日に至って、内務省に「神宮明治祭式」出版権許可願を提出し、同年十二月九日に版權が許可された。そして、明治十年十二月十日に「神宮明治祭式」が出版された。

この「神宮明治祭式」の特徴は以下に掲げる諸点にあったと言われている。

一、恒例祭を対象としたものであるため、遷宮祭や臨時奉幣祭等は除外されている。  
二、朝廷の許しを得ずに略儀になってしまった祭祀を復興し、神職が生活のために私に執行してきた祭祀・有名無実の行事・旧来の陋習を廃止することを目的の一つにしていた。その結果、それまで行われていて、これ以後廃止となった祭祀が二六、それまで行われていてこれ以後も続けられた祭祀が四二、新しく行われるようになった祭祀が二一という結果になった。

三、神宮祭祀と皇室祭祀との一体化が進められた。皇室祭祀から神宮祭祀に取り入れられた祭祀には以下のものがあった。神武天皇祭遙拝（明治四年四月から神宮で行われるようになった。以下（ ）内の年月はその意味）。天長節祭（四年九月）。新嘗祭（五年十一月）。元始祭と紀元節祭（六年一月）。春秋皇靈祭遙拝（十一年九月）。逆に、神宮祭祀

明治時代の伊勢神宮（新田）

から皇室祭祀に取り入れられた祭祀としては、神嘗祭があり、これは明治四年から皇室で行われるようになった。

四、従来の神宮の恒例祭祀には、その軽重によって、祭式に違いがあった。ところが、神嘗祭式に準拠して他の祭祀の祭式が定められた結果、すべてがほとんど同じ祭式になってしまった。それは、当時、最も重要な祭祀の仕方に則ることが祭祀全体を大切にすることになる考えられたためであると言われている。しかし、その後、祭祀の軽重によって祭式に違いを設けることの方が祭祀全体を大切にすることになると考えられるようになり、そのように改められたと言われている。

五、祭祀の行われる日が、太陰太陽暦ではなく、太陽暦に則って定められた。明治政府は近代化政策の一つとして、明治五年十一月九日に、従来の太陰太陽暦から太陽暦に改めることを布告し、同五年十二月三日が明治六年一月一日となった。これによって、祭祀の日をどのように改めるかがどの神社でも大問題となった。神宮の神嘗祭について言えば、明治六年七月二十日、明治政府は、内宮の神嘗祭を九月十七日とするように命じた。ところが、古来神嘗祭は、外宮では九月十五日に由貴夕大御饗、九月十六日に由貴朝大御饗と奉幣が行われ、内宮では、九月十六日に由貴夕大御饗、九月十七日に由貴朝大御饗と奉幣が行われていた。つまり、明治政府は旧暦の祭日をそのまま新暦に移すように命じたのである。これによって祭日は、実際には約一ヵ月程早くなってしまった。神嘗祭の根本は、その年に収穫された新穀を神に捧げることにある。ところが、太陽暦の九月十七日ではまだ新穀が成熟しないと、神宮側は政府に再考を要請した。しかし、教部省は、早稲ならば問題はないとして容易に考えを変えなかった。神宮の要求が認められたのは、明治十二年七月五日のことで、この時政府は、内宮の神嘗祭を十月十七日とすることを布告した。

### 式年遷宮の変化

「神宮明治祭式」によって、神宮の恒例祭祀の改革が終わった後、神宮最大の臨時祭である式年遷宮の改革が行われることになった。明治時代には、式年遷宮は三回行われた。それについて述べる前に、明治以前の式年遷宮を概観しておくことにする。

まず、古代に行われていた式年遷宮についてであるが、その特徴を一言でいえば、国家直営の遷宮ということになるといわれている。式年遷宮は二十年に一度、神宮の社殿を立て替えて、神様に新しい宮に御移りいただくものである。古代においては、この事業を行う人々は、京都の朝廷が任命して伊勢に派遣した。まず、建築事業を行う造神宮使について言えば、その長官（平安中期以降は神宮祭主の大中臣氏が兼任）も、その支配に属する技術指導者も京都から派遣された。そして、その下で働く作業従事者は伊勢・美濃・尾張・三河・遠江の国の神戸から集められた。

また、遷宮の際には御装束神宝も新たに作成される。それに従事する神宝使は、京都の朝廷の中に置かれ、御装束神宝は作成の後に伊勢に送られた。

遷宮に要する費用は、神宮の神戸・神戸からの税金が当てられ、それで足りない場合には国費から支出された。ただし、平安時代中期以降は、神宮の神戸・神戸からの税金が集まりにくくなったために、遷宮費用を賄うための税金が全国に課せられ、この税金は役夫工米と呼ばれた。

このような古代の遷宮に対して、近世の遷宮は幕府による遷宮と言うことができるといわれている。まず、造宮事業は幕府が任命した造宮奉行が管轄した。この造宮奉行は、宇治山田の地域に置かれ警察権と裁判権を握っていた山田奉行が兼任した。この造宮奉行の下で具体的な作業に従事した組織は「作所」と呼ばれた。それは神宮の内部にお

かれ、その長官は外宮は松木、内宮は藤波という神宮家が世襲し、建築作業には伊勢周辺の人々が従事した。したがって、造神宮使は任命はされたものの、祭祀の一部に従事する名目的な存在となってしまうた。また、御装束神宝も、両宮の作所の命令によって京都行事官が製作することになった。そして、完成したものが伊勢に到着すると、造宮奉行がこれを検査した。

費用は、徳川家康が慶長十四年（一六〇九）に造宮料三万石を定めて以来、歴代将軍もこれを踏襲して幕府が支出した。また、建築用の木材は、尾張藩の支配する木曾山と、紀州藩の支配する大杉谷から供給された。尾張藩と紀州藩はともに、徳川御三家の一つである。

さて、明治時代における最初の遷宮は、明治二年の遷宮（第五五回）である。これは、明治時代に行われたとはいえ、徳川幕府のもとで準備が完了しており、基本的性格は近世の幕府遷宮と変らなかつた。ただ、幕府の廃止にともなう、途中から造宮の管轄が、造宮奉行から、維新後に宇治山田の地域に置かれた地方政府である度会府に移った。また、この時に、両宮の垣根が近世においては瑞垣と内玉垣の二重であつたものが、その外側に外玉垣と板垣の二つを加えて、古代の通りに四重となった。

次の明治二年の遷宮（第五六回）は、これこそ最初の近代的遷宮と特徴づけられるものであるといわれている。まず、造宮事業が続けられる中で、次第にそれを担当する国家組織が整えられて、明治二十年十二月に、造神宮使庁という恒久的な遷宮組織が内務省の中に設置された。また、費用は全面的に国家支弁となった。

そして、防災上と景観上の理由から、両宮とも火除橋の所まで立て混んでいた人家を撤去して公園とした。また、内宮においては、近世においては内宮正殿と横並びであつた東宝殿と西宝殿を、古代通りに正殿の後に建てた。

明治四二年の遷宮（第五七回）においては、古制に則つた遷宮を永久に伝えるための配慮がなされ、神宮備林が設

定された。

明治三十七年七月二日、内務大臣の芳川顕正と宮内大臣の田中光顕は、侍従長の徳大寺実則を通じて、明治天皇に神宮の造宮方法の変更を上奏した。その内容は、御用材の確保が困難になってきたことを理由に、神宮の建築様式を、土中に直接柱を立てる掘立柱様式から、コンクリートの土台の上に礎石をおいて柱を建てる様式に変更したいというものであつた。明治天皇はこれを認めず、従来通りの建築様式で行うことを指示した。しかし、同時に、古代通りの建築様式を伝えるために必要な木材確保の方法を帝室林野局に下問した。これに答えて、明治三十九年、帝室林野局は木曾山に八千町歩の「神宮備林」を設定した。これは神宮用の木材を生産する山で、木の一本一本について、何回先の遷宮に用いるかを予め決めて、細心の注意を払って保護・育成するといふものであつた。つまり、神宮の建築様式を永久に伝えるために、森林資源の保護と育成が計画されたのである。

## おわりに

伊勢神宮においては、古代以来絶えることなく祭祀が続けられて来た。それは古代の祭祀遺蹟ではなく、生きている。そして、生きているからこそ、時代の変化の影響を大きく受けることにもなるのであろう。このことをどのようにとらえるのかは、「伝統」を重んじようとする者にとって、避けて通ることのできない重い課題のように思われる。



## 参考文献

- 神社新報政教研究室編『増補改訂・近代神社神道史』（平成元年七月、神社新報社）
- 武田秀章「近代天皇祭祀形成過程の一考察―明治初年における津和野派の活動を中心に―」（井上順孝・阪本是丸編著『日本型政教関係の誕生』昭和六十二年二月、弘文堂）
- 神宮司庁編『神宮要綱』（昭和五十四年七月復刻、東方出版）
- 鈴木庄市「神宮祭典御料の整備」（神宮司庁編『神宮・明治百年史』下巻、昭和六十年十月、神宮司庁）
- 神宮司庁編『神宮神田概要・神宮神田祭儀制定概要』
- 大西源一『大神宮史要』（昭和三十五年二月、平凡社）
- 宇治山田市役所編『宇治山田市史』上巻（昭和六十二年七月復刻、国書刊行会）
- 神宮文庫編『明治四年以降神宮職員年表』（平成三年三月、神宮文庫）
- 鈴木義一「頒布大麻及び曆について」（前掲『神宮・明治百年史』下巻）
- 中西正幸「神宮明治祭式について」（神道学会編『神道学』復刊第一五七号、平成五年五月）
- 中西正幸『伊勢の遷宮』（平成三年九月、国書刊行会）
- 増井義雄「神宮の森林と苑地」（前掲『神宮・明治百年史』下巻）
- 武田秀章「遷宮の歴史・近代―明治国家と官宮造替―」（『歴史読本』特集・伊勢神宮・遷宮の謎―）一九九三年三月）

（にった　ひとし・皇學館大學講師）